

## ＜追悼＞ 村松 剛先生を偲んで

1994年5月17日、筑波大学比較・理論文学会の創立メンバーのおひとりとして活躍された村松剛先生が咽頭癌のため亡くなられました。65歳でした。われわれに対する生前の親身な御指導を感謝するとともに、謹んで御冥福をお祈り致します。

（編集部記）



## 師 恩

李 映子

村松先生の研究室に初めてうかがったのは、修士論文を終えて、今後の進路について相談するためだった。当時、村松先生は地域研究研究科の院生にとって「鬼の村松」という異名を持つ怖い存在だった。

中間発表の合宿で、村松先生の質問攻めにあうと立ち往生する学生が多く、女子学生のなかには泣き出す人もいるという噂で、その年の中間発表に村松先生が出席されるかどうかが学生たちの間で大きな関心事になっていた。

幸い私は村松先生の追及にあわずに無事論文を書き終えていたのだが、文芸言語研究科の博士課程に進学する問題で村松先生に相談するしかないと思い、意を決して研究室のドアを叩いた。

ところが、今後の進路の話がいつの間にか作家たちの文体論議になってしまい、2時間ほど話に熱中した。あの村松先生と時間のたつのも忘れて語りあえるなど、私のような臆病な人間にとって想像もできないことだった。先生の鋭い眼差しと飄々とした風貌から予想していた「恐ろしい人」というイメージはこの時に吹き飛んだ。後に、博士課程に入り、演習の授業の中で村松先生の真の恐ろしさを実感することになるのだが。

\*

村松先生の研究室はいつも資料とファックスと煙草の吸殻で机の上が埋まっていた。火事にならないのが不思議なくらいだった。コーヒーを好まれていた先生は、コーヒーカップを置く空間だけは確保していらっしゃるようだった。私は授業の前には先生の部屋の山のような灰皿を片づけることにしていた。筑波大学という固い人工的な空間のなかで、私はどこからも拒絶されていると感じていたのだが、雑然とした村松研究室だけは、私にとって心の拠り所となっていた。

村松先生のところには、いつも学部学生や院生が論文の相談によく訪れる。それも私達の演習の授業が終わっていない時間から外で列を作って待っているのだ。5時過ぎに授業が終わった後から一人一人の論文の相談に応じるので、先生の帰宅は夜遅い時間になることが多かった。

先生はある時、「僕が学生のころ、今後評論活動に専念するか、教師の道に進むかで恩師に相談したことがある。その時、恩師は両方やりなさいといわれた」とおっ

しゃったことがある。恩師の言葉のままに、先生は教授としての道と評論家の両輪を完璧にこなされていた。ある時先生は「昨日地方で講演をして、遅くなって飛行機にのれなかった。次の日授業があるので寝台列車で帰ってきたよ」となげなくおっしゃったことがある。

これほど忙しい日々を送っておられる先生が、どうしてあのように次々と著作を発表できるのか不思議でしょうがなかった。先生は行動のなかで考え、その思考は、そのまま記述すれば著作になるほど理路整然としたものだった。先生の頭脳のなかには様々な引き出しに資料がどっさりと整理されて入っていた。たとえば、歴代天皇の名前と当時の状況、その下の引き出しにはフランス象徴派の詩人についてなどなど。

＊

数年前、先生の筑波の自宅が過激派に爆破されるという事件が起きた。私たち院生は大挙して先生の自宅に駆けつけた。一階の居間は完全に廃墟となっていた。私達は焼け残った本の煤を払ったり、まだ使えそうな家財道具を整理することにした。奥様は、ネコのエサの缶詰が庭に出ているのを見て「これが他の人の目にふれると困るのよ。ネコを飼っているのが見つかってしまうわ」といって心配そうに隠しておられた。きっと先生の日々の緊張や頭脳の疲労は、この奥様によって癒されるのだと実感した。その時、先生は手に小さい鉢を持って奥から出てこられ、「順子、これはどこに置いたらいいの」と奥様に聞いておられた。私たちは庭の水道の前で真っ黒になった皿を磨いていた。あの時の光景がどうしても脳裏から離れない。深刻で怒りを覚える筈の爆破事件が一遍の日常の喜劇に転じていた。そのあと、月刊誌の記者が取材に訪れ、先生は真っ黒になっている居間の壁を背景にスポットライトを浴びて丁寧に取材を受けておられた。本当のことを言う人は敵をつくる、しかし、なにがあっても屈しない、そのような毅然とした姿が名画のように心に焼きついた。

＊

すでに先生は若い時から死について達観されていたのだろう。私たちが病名を知らされお見舞いにうかがった時、先生は相変わらず煙草を吸っておられた。「咽喉科の病院で煙草が吸えるところはここしかないんだよ」とおっしゃり、おいしそうに吸っておられる。先生の病室は大学の研究室にベットを置いたのと同じで、やはり本と資料がどっさりと運ばれていた。いかなる病魔も先生の知的活動を妨げることはできない。私は恥ずかしくなって花瓶に花を生けるため外に出た。先生は喉を手術すれば声が出なくなるからと「声が出なくなるくらいなら切らないほうがましだ」と手術を断られたそう。

先生の「戦う知性」をこの時ほど痛感したことはない。先生にとって「声」は闘士の剣に等しいことなのだ。

「だんだん年をとると博士論文なんてどうでもよくなるから、早く書きなさい」と先生は声を振り絞るようにおっしゃった。もうすでに私は論文の重圧に耐えきれず、勉強から遠ざかっていた時だった。師とはこんなだめな弟子でも最後の最後まで心配してくださるものなのだろうか。これまで受けた師の恩にどのようにお応えしたらいいのだろうか。期待を裏切ってしまったことで私は先生の前に立つ資格はないと思っていた。先生のこの時の遺言ともいえるお言葉は今も脳裏に焼きついている。私が自分の人間性を疑いたくなる時、先生に最期まで信頼されていたのだから、もう一度頑張ろうと自分を奮い立たせてくれる天の声として耳に焼きついている。

私は日本に留学に来て、偶然にも最高の人間に出会うことができた。これは単なる偶然だと考えていいものか。

師から弟子に受け継がれることがある。それは人間の生き方だと思う。私は現在は同時通訳者として、大学の非常勤講師として忙しい日々を送っている。そのなかで、村松先生が死の最期の瞬間まで自分と戦い続け、知性の声を社会に送り続けたように、私も全力で仕事に取り組まなければならないと肝にめいじている。

青春の一時期に学問の師に出会い、その生き方に触れ、弟子として期待をかけていただいたことを生涯忘れることはできない。いつの日か先生のご恩にお応えし、あの世で先生に褒めていただけるよう努めたい。

(1994年11月25日)

## 研究室と図書館と

小川 亮彦

博士課程の編入試験を受験するにあたって、昭和62年の秋に、指導をお願いできるかどうかの相談にうかがったのが、村松先生にお会いした最初である。こちらの心配ごとである、大学院のシステムやどうすれば受かるか、という話は一切なかった。もっぱら研究テーマの妥当性と方法上の可能性の検討だった。1時間ほどで「その研究は難しいねえ、でもやってみなさい」という言葉をえて、研究室を退室した。ぐったりした。とともに何年かぶりで眼が覚めたような気がした。軀は疲労困憊しているのに頭は冴えてくるといった不思議な感覚は、以後、平成4年に退官されるまで、演習を終えて研究室を退室する際にわれわれ院生が毎回経験することになる。

毎週、木曜日に大学院の正規の演習があった。またそれとは別に水曜日には私的な研究会を設けていただいた。どちらも1時間や2時間の延長はざらだった。休講はきわめて少なかったし、のみならず先生の時間の許すかぎり補講も度々だった。ある年度は3月初旬まで演習があった。学内は閑散としているのに、われわれだけが相変わらず重い本を抱えて研究室に集っていたのが懐かしい。

水曜日の研究会では、論文指導の他いろいろな物を読んだが、なかでも、平成元年から『醒めた炎―木戸孝允』を徹底的に追跡したのが思い出深い。著者をコメンテーターにしての輪読というのも奇妙ではあるのだが、そこで使われている資料をできるかぎり再検証して、「世界史のなかの明治」を学習してみようとわれわれは思ったのである。あんなに大変な作業が待っているとは予想もしなかった。一回毎に参照すべき資料が多いので、貸出と運搬の手間を省くため、場を研究室から図書館内のセミナー室に移したのは始めてすぐのことである。筑波の図書館の、どのフロアのどの片隅にどんな本があるかを知ったのは、まったくもってこの研究会のおかげである。そして、せいぜい半年で読み終わるだろうという目論見は初めの数回で消し飛んだ。結局2年間かかった。

木戸孝允の人物造形の裡に、村松先生自身の生き方を読み重ねていく評者は多い。だがなによりも『醒めた炎』は先生の、先生の方法での物語作成だったと思う。物語（histoire）と歴史（histoire）とが合一する文学空間の実現。資料を着実に駆使しながら、「評伝」という形式で、ある人間とその時代の物語を描く手法は、ヴァレリーのテキストを精密に追う作業が結局は『評伝ポール・ヴァレリー』という形

に結晶していった昭和43年の頃から、終生変わらなかったのではないか。

＊

水曜日以外に図書館内の一角で先生の姿を見ることも多かった。書棚の前で本をめくっていたり、コピーを取っていたり。学生たちに混ざって座席に坐り、和仏辞典を横に置いて、フランス語の文章を一心に書いているところに出くわしたこともある。「ちょっと読んで、わかりにくいところを言ってくれないか」とノート数ページ分を渡され、何やら日本の教育制度についての記述だなあ、と思っていたら、それがスイスのテレビ局のインタビューに応える原稿だったりした。後日そのテレビ局の人に、まるで大学教授のような語り口だと言われたとかで、「だってしかたないよ、そうなんだから」と苦笑されていたけれど。

＊

村松先生は実に多くの顔を持っていたし、幾つもの人生を生きたと思う。しかし、私にとっては初めから、仏文学者であり、文芸批評家であり、比較文学研究者であり、ずっと変わらずそうであった。

木曜日の比較文学の演習では、19世紀のフランス詩の緻密なテキスト・クリティックから始まって、夏目漱石から三島由紀夫に到る近代小説の流れや、日本象徴主義を中心とした近代詩などを教えていただいた。博覧強記の背後に徐々にわれわれが先生から感じとったのは、＜明晰であることに対する倫理感＞といったもののように思う。ときには中原中也の抒情的な詩を詠じた先生の内面に柔らかな感性がなかったはずはないけれど、理知とボエジーとの見事な融合は、徹底的に明晰であることの先にしか実現しないものであったろう。

われわれは数年に互って演習で先生に喰い下がった。なにかしら褒められる、というような僥幸を期待できないのは覚悟の上だった。何度ノックアウトされても立ち上がるボクサーの向こう見ずだけが拠り所であったかもしれない。だが、もしわれわれが自分を諦めてしまえば、目の前の富が逃げてゆくのである。限られた時間を過ごすのに、謬見と蒙昧を恥じている暇はないことをわれわれは本能的に感じていた。無論、あの龐大な著作群に村松先生の魂は宿っている。だが、膝を突き合わせて、あの凄味を肌で感じる経験はかけがえのないものだった。

平成4年までの数年に及ぶこうした研究室での息吹は、遺著『西欧との対決』のなかにひとつの形となっている。主として昭和文学について書かれた文芸批評を集めたもので、さまざまな修正加筆がなされているのだが、そのうちの何箇所かは、演習内容と関連のある比較文学的な視点の導入であると言ってよい。ところどころ、ああ、あの演習のときの痕跡だ、とわかる。われわれの稚拙な疑義に答えてもいて、文字通り形見と覚えてならない。

先生の著作の「後記」は、どんな本であれ、たいていその一冊の熱気を鎮めるような不思議な静謐さを示している。全力を出した者だけが手にする平穏だろうか。入院先の病室で校正作業に没頭していた『西欧との対決』には、「後記」はない。書いたとしたらどんな「後記」になっただろう。

＊

短い論文の査読を初めてお願いした折り、「君の文章の表現は、まるで＜論文＞だね」と言われたことは忘れられない。論文の視点や構成の問題で思い悩んでいる者にとって、表現上の巧拙についての指摘は、どうしたら三振せずにバットにボールを当てられるかを心配している者にホームランの打ち方を論ずのに等しい。しかし、論文は中身の質とともに読ませる文で書かれねばならぬ、という教えは身に沁みだ。

文芸・言語の研究棟とその北側の建物との間に遊歩道があり、そこを東から歩いてきて階段を上ると、広場を挟んで正面に図書館が迫ってくる。冬のある夜、一緒にその階段を上っているとき、図書館から漏れる煌々とした光と机に向かう人影を見て、村松先生はふと「夜ここから図書館を見るといつも、学生たちはよく勉強していると思うんだよ」とおっしゃった。夜更けまで図書館で過ごすのが学生の多数派ではないことを先生も知らなくはなかったろう。しかし、若い人々すべてに対して先生は常に、お前たちは何者かになれるんだ、という信頼感を持って接してくださったように思う。何者かにならないといけないのに何者にもなれない、という強迫観念に苛まれている者にとっては、これは救済だった。

＊

厳しい指導を受けた。あらゆることが記憶として残っている。だが記憶など今はどうでもいい。どう思い出そうとしても、今はあの優しい笑顔しか思い出せない。悲しいとか寂しいというのはきっとこういうことなのだろう。

（1994年11月30日）

## 追　　悼

### —ピラミッドの星—

加藤　百合

昭和58年の春筑波大学の比較文化学類に入学した。大学の門を入ったばかりの私が初めて聴いた講義が、村松先生の比較文学概論だった。

先生は長身を傾けて一直線に教場に入ってくられると、一言のあそびもなく講義に入られた。近代の西欧の影響以前、大陸の影響以前、日本人は人が死ぬということはどうとらえていたのか、異文化の思想を受け入れた後、其の跡はどういうかたちで残ったのか、葬送の儀礼の変化や挽歌の評釈を通じてゆっくりと、しかし淀みなく講じてゆかれる先生の声に、私は、息をのんで聴き入った。

そのときの、頭の中が広々と拡がったような感覚をなんと説明してよいかわからない。…卒業後上京して、東京タワーに上った時、エレベーターが上昇するにつれてみるみる雑踏と喧騒は眼下に遠ざかり、かわって土地の起伏と文化の密疎をもつ東京という都市の姿がはっきりと立ち現れてきた。それを見たとき、唐突に確信した。「ああ村松先生は世界をこういう目で見ていらっしゃるんだ。」

それから四年の間—先生は当時（昭和57～61）比較文化学類長をつとめておられ「醒めた炎」も連載中で（資料を掘り出しにパリの古文書館に通ったと後にうかがった）多忙を極めておられた時期であった筈だが一度も休講にせず時間一杯教えて下さった。—先生の開講された授業には、何を措いても出席した。

親友であった三島由紀夫について「語るべき時でしょう。」とおっしゃるまで先生は数年間迷われた。—僅か数人の学部生を相手にして先生は、いつも、ご自身のものとして切実に向き合ってくられた問題を講義して下さっていたのである。戊辰戦争が再び起こったとしても聴講中席を立つ学生はいなかったらうと思う。

先生は「評論家」と人に評されることが多かった。が、評したり、論じたり、ということは誰に関してもなさらなかった、ように思われる。

例えば小林秀雄が優れているとか、誰かが間違っていると一切言われなかった。常に、これはこういうテーマを持って書かれている、こういう時代の空気の中でこういう意味を持っていた、これはこういう意味の言葉である、とご自身の読みを一見淡々と教えて下さった。ただ、読むに値すると信じた人の、一番本質的と信じる



ところだけを語られ、それ以外の部分を取り上げることは決してなさらなかった。

末期の眼、という言葉があるが、先生は常に曇りのない透徹した目で世界を見つめていらしたように思う。漠然と「インテリの怠惰」に反発して、早く職に就いて働きたいと考えていた私が志を立てて進学したのは、精神的怠惰のまさに反対だった先生の警咳に接したお陰である。

＊

卒業論文の季節になった。

何をお尋ねしても、先生はこちらのつたない言葉に最後までじっと耳を傾けて、それから、それこそ掌を指すように教えて下さった。中空を少し見上げるようになさって、何一つ資料をご覧にならない儘、具体的な事実関係を次々に挙げ、詳細を極めて論じ出される不思議さとこわさは、教えを受けた者が揃って口にするところである。後に東大で元同級生という方が「水際だった頭の切れ方だった」とおっしゃるのをきいて、やはりそうだったかと思った。

比較文学は専攻が開いた初年度でもあり、燦星の如き先生方が揃っていたが、極端に頭のいい人には二通りあった。ご自分にはた易いので、学生にも要求の高い方と、逆に自分は全然基準にならないことをご存じで学生のことはひたすら案じ、庇って下さる方と。先生は後者だった。卒論の中間発表のとき一人がまだ構想段階で躓いていた。N先生が「…この問題についてこれまで出た全ての文献を図書館で洗って、それを整理してコメントをつければ1章はよいでしょう。— 3日で出来ます。」ときびきびおっしゃった。其の途端いかにも慌てたように「…それはNさんは3日でできるだろうけれど…」と抗議なさったのは村松先生だった。

どうしてあんな偉い先生があんなに懸命になってくださったのだろう。

不肖の弟子であった私は論文に苦しみ、下書きを読んでもいただくお約束の日までに、書き散らしたメモ様のものしかできていなかった。どういう口実で延ばしていただこうか、考えあぐねて、とにかく紙を掻き集めて行き先生に差し出した。恐縮で言葉もない。(こんな状態で、とてもお見せできるものではありません…)ところが先生はぱらぱらとはぐってみることもなさず、いきなり読み出された。時折「この文はどこに続くの」(終わりの切れた文さえ書きなぐってあった)と確かめながら、鉛筆で文の続き具合を辿りながら。「ここは…ということをいいたいのじゃないですか。それなら…と書いた方がいいでしょう。」「ここは例が要ります。例えば…と入れておきましょう」。そのうち日が陰って薄暗くなってきたが先生は一度も顔を上げられなかった。日の傾くにつれて先生の用紙を持つ手が無意識に少しずつ角度を変えてゆく。終わったときはすっかり夜で、夕食時はとうに過ぎていた。十二月のことであったが先生はうっすら汗さえうかべておられ、「〇〇さんの論文

の方が早く読めました」と流石に少し咎めるような口調で言われた。

＊

ご葬儀の日、白い百合の花の上に掲げられたお写真の中の先生の実顔を見上げ、限りなく懐かしかった。

先生は忘れられない風貌をお持ちだった。

研究室をお訪ねすると、先生は、大抵長椅子に横になって新しい頁をすーすーと切りながら、新着の洋書を余念なく読んで居られた。ノックの音にがばっと跳ね起き大きな目を見開かれるのだが、おずおずと立つ私などの姿を認めると、その瞬間、にこっ、と顔一杯で笑いかけて本を置き、「何、どうしたの」と訊ねて下さるのだった。それはいつおうかがいしても変わらなかった。全身が暖かくなるような感じだった。沁みいるような、あの笑顔、あのような優しいお声を私は遂に他に知らない。

戦後の日本人の心性、など、大きなテーマのシンポジウムや討論会等に参加されることも当然おありだった。一巡目、先生は思い詰めたような口調でご自分の意見を話され、なにが待ち受けるような構えで他の人の言葉を聞かれる。しかしそのうちその場の雰囲気が決まってきて、皆が活気づき、機知の応酬を交えて、その場における「めでたしめでたし」に向かい出すと、もう先生は黙り込んでしまって、なんともいえない哀しそうな目をして、天井を向いたり、逆に下を向いたり、…居ても立ってもいられないような風情であった。大人の人で、あんなに哀しそうな、淋しそうな顔をする人も、私は他に知らない。

学生のコンパなどにも必ずでて下さったが、それも独特であった。ウイスキーの瓶の口のところを提げて足早に入っていらっしやると、入口の一番近い椅子にすんと腰を下ろして、無言で、麦茶でも飲むように、コップに注いではたてつづけにひとしきり飲み、がくりと酔われる。長身の痩身を折って、ひたいに黒い髪のかかった先生は、十九世紀のロシア文学中の人物を思わせた。

そういうある時、ピラミッドの中からは星がよく見えるという話をされた。「俺に（そういう時は「俺…」と言われた。）言えばピラミッドの中に入れてやるぞ」…毎年中东にいらっしやっていたことを知らなかった私達はただのお伽話のようにそれを聞いていたけれど…。

＊

村松先生のような先生にお会いすることは、今後もうないだろうと思う。淋しい。

（1994年11月20日）